

論文の内容の要旨

氏名：郡司 郁

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会情報）

論文題名：シェイクスピア劇の女性たちにおけるキリスト教的描出の様相

1. 本論文の目的

本論文は、シェイクスピアの劇作品の主要な材源と各作品への書きかえに注目し、材源と各作品との相違から読み取れる女性たちのキリスト教的描出の様相の有無を検証することで、各劇作品のキリスト教的ヴィジョンを探り当て、世俗的作家シェイクスピアという根強い見解に抗して、シェイクスピアがキリスト教徒作家であることを論証することが目的である。なお、書きかえられた箇所に見られる女性たちのキリスト教的描出の判断基準は主としてリーランド・ライケンが“Shakespeare as a Christian Writer”で提示したキリスト教的であると解釈する場合の5つの要素に依拠しており、それらは下記の通りである。

- (1) 聖書、『祈祷書』のようなキリスト教文書、教会生活への明らかな言及
- (2) 劇に見られる概念とキリスト教教義との一致
- (3) 劇で具現化されている現実の見方と聖書の現実の見方との一致
- (4) 劇に見られるキリスト教的経験の描写
- (5) キリスト教的な諸原型やシンボルの存在

また、これに

- (6) キリスト教の素地としての枢要徳と七つの大罪

も追加設定した。

2. 本論文の構成

目次

序論 研究の目的と方法

第一章 シェイクスピアのキリスト教観

第二章 喜劇と問題劇におけるキリスト教

第三章 『ハムレット』の女性たちとキリスト教

第四章 『オセロー』の女性たちとキリスト教

第五章 『リア王』の女性たちとキリスト教

第六章 『マクベス』の女性たちとキリスト教

結論

引用文献一覧

3. 本論文の概要

第一章はシェイクスピアのキリスト教観について論じた。シェイクスピアが活躍した16世紀後半から17世紀にかけてのイギリス社会は、ヘンリー八世が行ったイングランド教会のローマ・カトリックからの分離に始まり、メアリーの治世のカトリック体制への揺り戻し、その後再びエリザベス一世の治世でのイングランド教会体制への変動という混乱した時代であった。その結果、国教はイングランド教会でありながらも国内には依然としてカトリック教徒も存在し、彼らに対する迫害の時代でもあった。シェイクスピアの時代はこのようなキリスト教の変動とカトリック迫害の時代であった。

シェイクスピア自身の信仰の記録は残されていないが、両親の実家はカトリックであり、特に父ジョンは彼の「信仰上の遺言書」の発見によって密かにカトリック教徒であったとされる。また長女スザンナも国教忌避者名簿に名前が残っており、シェイクスピア一家はカトリック教徒であったと推測される。したがって、この当否の確定はできかねるとしても、イングランド教会体制下において、シェイクスピア自身は迫害を回避するためにイングランド教会に属しながらも、比較的カトリック信仰を取り入れやすい環境にあったということは言えるであろう。

第二章以降は、このようなシェイクスピアのキリスト教に対する姿勢が各作品において描出されているか、また描出されているならばそれは具体的にカトリック的なのかプロテスタント的なのかを、女性たち

の処女性や貞潔の問題と照らし合わせて検証した。

第二章は喜劇『ヴェニスの商人』と『お気に召すまま』、問題劇『尺には尺を』の女性たちの分析である。『ヴェニスの商人』のポーシャやジェシカ、『お気に召すまま』のロザリンドやシーリアはみな処女性が重視されたカトリック的な女性たちである。特にロザリンドとシーリアのアーデンの森への追放の旅は、カトリック教徒の追放のアレゴリーと解釈される。その一方で、彼女たちは父親の意見に従わず自ら選択した結婚相手と結ばれ、夫と対等な関係を築こうとする。つまり、彼女たちは処女性を重視するカトリック的父権社会から脱却し、婚姻においては夫からも支配を受けないピューリタンの新しい理念の体現者でもある。また、ポーシャは処女性の重視という点でマリア的でありライケンの提示する 5 番目の要素に該当し、ロザリンドは羊飼いの書きかえがイエスを想起させ、これも 5 番目に該当すると言える。

問題劇『尺には尺を』は四大悲劇の最初の作品『ハムレット』執筆の後に書かれている。シェイクスピアは『ハムレット』において女性の純潔の問題を扱ったが、その後『尺には尺を』においてもイザベラを中心に女性の純潔の問題をさらに鋭く描いている。イザベラは修道女見習いという設定においてライケンの 1 番目の要素に該当している。彼女は信仰篤いカトリック教徒であるにも関わらず、マリアナとのベッドトリックを容認するが、これは自分の処女だけを守ろうとするイザベラの利己心の表れではなく、彼女はジュリエットやマリアナを通して「純潔な結婚」というピューリタンの理念をも容認している女性であると解釈できるとした。

第三章は『ハムレット』の女性たちの分析である。ガートルードは早すぎる再婚を息子ハムレットに非難され自己の罪の認識に至る。これはライケンの 4 番目の要素に該当する。そして彼女は死によって、クローディアスのプロテスタントの世界からハムレットや前夫のカトリックの世界に回帰し、聖家族の姿を取り戻す。それは同時に現夫クローディアスからの自立をも意味し、この点においてはピューリタンのである。オフィーリアについても同様である。彼女の死は処女性の保持という点ではライケンの 5 番目の要素に該当しカトリック的であるが、恋人ハムレットからの自立と捉えるとプロテスタント的である。

第四章は『オセロー』の女性たちの分析である。デズデモーナもまた父に背き自ら結婚相手を選び、伝統的な父権社会の女性像に反している。さらに父のいるカトリック国ヴェニスを離れ、異国での結婚生活を選ぶという反カトリック的側面もある。その一方で、劇の後半では結婚当初に彼女が見せた夫に臆せず意見を述べる姿は消え、冷酷な仕打ちをする夫に耐え忍ぶ伝統的で貞潔な妻であり、カトリックとプロテスタントの両方の要素が見え隠れしている。また、死の場面での彼女の蘇りはイエスを想起させ、キリスト教的犠牲と赦しの象徴的姿をも見せる。この点でライケンの 5 番目の要素に該当している。エミリアも同様であり、はじめこそ夫イアーゴに従属しているが、最後には毅然とした態度で夫の悪事を暴き、夫から自立する妻である。彼女はキリスト教の素地である枢要徳の勇気の体現者であり、6 番目の要素に該当する。またピアンカは、カトリック社会においてダブル・スタンダードのもと容認されていた娼婦という負の側面を背負っている。この点においてカトリック的存在であると言えるが、一方で彼女は女性たちの中で最も男性に依存せず自立した女性であり、精神的な純潔は肉体的処女性に支配されないというピューリタンの理念を体現した人物でもある。さらに、娼婦はマグダラのマリアを想起させることから、ライケンの 5 番目の要素に該当する。

第五章は『リア王』の女性たちの分析である。ゴネリルとリーガンは甘言で父リアを騙し、創世記における蛇のようなキリスト教的視点からみて悪の存在である。またエドモンドとの関係においても七つの大罪とされている高慢さや貪欲さを露わにする。この点で 6 番目の要素に該当し、彼女たちは最期まで自分たちの罪を認識しない。しかしそれは伝統的な父権社会の犠牲者として捉えることもできる。コーディリアはデズデモーナ同様にイエスを想起させライケンの 5 番目の要素に該当し、キリスト教の赦しの象徴的存在である。また、ロザリンドたちのアーデンの森への旅がカトリック教徒追放のアレゴリーであるように、彼女のフランスへの追放には迫害されたカトリック教徒の姿が投影されている。しかしそれは同時に父リアからの脱却であり、夫フランス王に戦争を懇願できるような対等な結婚生活の始まりでもある。つまり、彼女もまたカトリック的人物でありながらもキリスト教の新しい理念が描出された人物である。

第六章は『マクベス』の女性たちの分析である。『マクベス』の前作である『リア王』のゴネリルとリーガンの邪悪さはマクベス夫人に継承されている。マクベス夫人は魔女の予言に触発され、夫を王殺害へとそそのかす悪女であるが、これはマクベス夫人に当時のカトリック教徒迫害としての魔女迫害が投影されていると考えられる。しかし、マクベス夫人はマクダフ母子の惨殺を聞いて罪の意識に目覚めることから、ライケンの 4 番目の要素に該当している。彼女は元来悪女なのではなく、意見を述べる夫の良き協力者だったのだということが示唆されており、彼女もまたピューリタンの妻の一面を垣間見せている。マクダフ

夫人は、マクベス夫人が罪を認識するきっかけとなっている点でライケンの 5 番目の要素に該当し、またマクダフがマクベスを倒す正義の原動力になっている。

以上のように、シェイクスピア作品を丹念に読み解いてみると、喜劇や問題劇の女性たちは結婚で幕を閉じ、悲劇の女性たちは死で幕を閉じるという点では異なっているが、どの作品においても女性たちにはカトリック的側面とプロテスタント的側面、特にピューリタンの側面の両方が描出され、交錯していることが見て取れるのである。したがって、材源からの書きかえとライケンのキリスト教的要素との照合から、シェイクスピアは劇作品に意識的にキリスト教的ヴィジョンを取り込み、劇中の女性たちの処女性や貞潔の問題を通してカトリックの枠組みで劇を構成しながらもプロテスタント的要素も絶妙なバランスで取り入れたと結論づけることができる。イングランド教会体制を維持することによってカトリック教徒の反乱や迫害が繰り返された混乱した時代背景において、シェイクスピアは臆することなく宗派にとらわれない柔軟な信条と思考で劇作品を創作したキリスト教徒作家なのである。